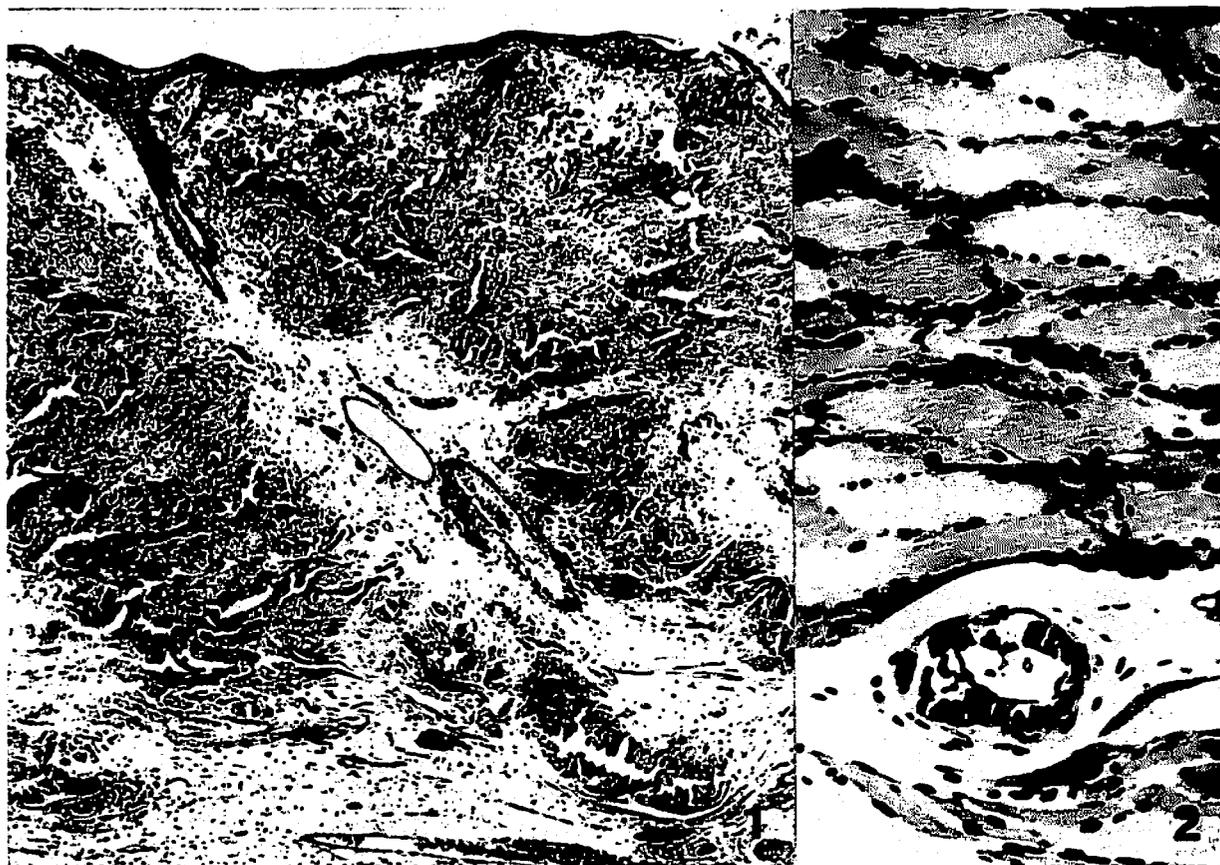


犬の皮膚

日本獣医畜産大学獣医病理学教室出題 第26回獣医病理学研修会提出標本No.445



動物：犬，セッター，雄，10ヵ月齢。

臨床事項：60年10月2日，元氣消失，食欲不振，下痢を主訴として某動物病院に来院。急性膵炎の症状がみられたので膵炎治療薬FOYを投与。一過性黄疸，腎機能低下，持続的な血清ALP，GOT，GPTの高値がみられ，状態は好転しなかった。10月20日頃から渗出性湿疹が腋窩部に現われ，漸次鼠径部，四肢内側および腹部に拡大，脱毛，細顆粒状に硬化した。11月9日日本学に搬入されたが，全身状態が悪化し衰弱著しく，11月21日死亡した。

病理所見：①広汎な皮膚の石灰沈着および潰瘍・化膿性炎。②骨格筋の変性萎縮，石灰沈着。③肺胞壁の高度の石灰沈着。④腎尿細管の石灰沈着および硝子滴変性。⑤心・肺・脾・骨格筋その他諸臓器動脈壁の石灰沈着。⑥心筋の巣状壊死と線維化。⑦骨組織の骨梁の萎縮。

考察：皮膚の石灰沈着は真皮と皮下織の弾性線維・膠原線維ときに毛包周囲にみられ，転移性石灰沈着と考えられた。本例における皮膚・肺・腎および諸臓器動脈壁の転移性石灰沈着と骨格筋の変性萎縮という病理像は，副腎皮質ステロイド過剰症の所見と一致すると思われた。本例の場合，下垂体・副腎には異常が認められなかったが，生前プレドニゾロンの投与に加えてカルシウム剤およびビタミンDも投与されていたので，医原性クッシング症候群の皮膚病変であろうと考えた。

病理組織学的診断：副腎皮質ホルモン過剰によると思われる皮膚の転移性石灰沈着。

(写真1) 提出標本，皮膚HE。

(写真2) 肋間筋HE。